ガラスの両義性 動きと静寂の境界

序章

「なぜ私はガラスを使って作るのか」

私がガラスを用いた制作活動を始めてから28年以上になる。最初の10年は、作ることを安定させることに夢中だった。その次の10年は、作り続けることに必死だった。そして、ある時期から、自身の制作に対して疑問を持つようになった。

なぜ私はガラスを使って作るのか。

ガラスという素材に興味を惹かれていることは間違いない。ものを作り出すことも、好きなのだが、なぜそこに拘っているのか、何を目指しているのかということを考えてはこなかった。継続して制作してきたなかで、この先をどのように継続していくのか、それとも違う方向を向くのか、それを考えるようになった。

私は自分が工房の中で、その疑問を抱えたままの曖昧な姿勢で作品を作り続けた。その制作過程から生まれた作品は、自身の考え方を反映していないと感じるものが多くなっていった。使いやすい材料を使い、覚えている技法で制作をしていたのだが、それらは私が作ることができるものであり、作りたいものではなかった。

このような制作の繰返しは、制作行為そのものを刺激を持たない作業と変化させ、徐々に制作意欲を失っていくことになっていった。

私はこの状態を打開しようと試行錯誤を繰り返した。

私はその試行錯誤の中で、このような曖昧な姿勢になる要因が、私が制作を継続していくために見つけたことにあると考えた。無論、制作は継続しなければならないが、その中で制作物や周囲の環境は変化する。その変化に対応しようとしたときに、私が積み重ねてきたものが私自身を動きにくくしたのである。

まずひとつは、制作環境の閉塞感だった。

私は自身の手で作った制作の場を持つ。その設備や材料の選択は、ある一定の技法を用いて制作の成果を出せるように考えたものである。制作物のクオリティを向上させ、安定させるためには必要だった。私が求める作業環境を借りることができる場所もなかった。

しかしそれが私の制作に、ある種の条件を作ることになっているのではないかと考えた。制作環境が制作自体に影響を及ぼすことは当然だと思う。しかし、制作物が与えられる表現の傾向に限界値を作るような場や設備は、思考の拡大を妨げるものになってしまうのではないか。

次に、制作の思考プロセスについてである。私は造形の分野でインテリアデザインを学んだ。そこで得た制作プロセスの経験をベースにして、制作活動を進めてきた。一般的に、デザインをする時、適材適所で素材を選択していくが、私も用途と素材、技法の適正な関係を目指して制作物を考えてきた。しかし、実際には私が制作する時には、最初から素材はガラスと決まっている。自分で操ることができる素材と技法を持つことが、自身の特徴とストロングポイントになるはずだと考えているが、それ自体が制作プロセスにねじれを起こしていた。これは常に制作しようとするときにジレンマとなって意識の片隅にあった。

最後に、技法についてである。私は、ガラスを電気炉を用いて熔着する工程を主体とするフュージング技法にめぐり合い、それを用いてガラスを造形してきた。熱でガラスを熔かして成型する技法は、フュージング技法のほかにも吹きガラス技法やバーナーワーク技法がある。また冷間で成型するカット技法など様々な技法が存在する。これらの技法がそれぞれガラスに与えられる表現が大きく異なるため、多種多様なガラスへのアプローチが生まれている。その中でも熱を用いる技法は、熱によってガラスの性質を変化させることができ、固体、液体それぞれの状態で、ガラスの物性の表情を作り出すことができる。そしてその変化の過程を表現として常温で保存できる物質であることが大きな要因と考える。

私が自身の制作に用いる技法を選択するにあたり、作品に必要ということが優先ではなかった。自分が制作環境を求めた時に、制作の継続が可能という理由が優先された。フュージング技法自体に強い魅力を感じていたが、その中には制作の容易さという要素も含まれていた。そんな中で、私のガラスにおける制作表現は、フュージング技法に基づいて決められてきた。考えたものがフュージング技法で制作可能かを必ず検討した。そして、フュージング技法でどんなものを作ることができるのか、という興味が、自分の制作思考と同じ大きさに感じられるようになった。この思考を繰り返すうちに、フュージング技法を用いることが必然となり、それを生かす表現が自分の考えるべきことだと錯覚するようになった。

これらの要因は、変えてみることが、私の制作の中にある自分に対する問いかけに触れるきっかけになるのではないかと考え、行動を起こした。

６年前から本学で私は、この自分への問いかけの答えを探るため、新しい研究活動をスタートさせた。ガラス造形制作に関わる要素についての再構築に挑むことにした。制作環境を自分の工房から大学へと変えた。それまでの使い慣れた材料や技法を封じて、自分をできるだけ「非日常制作」へと導くようにした。

私は指導者としても他大学でガラス造形教育に携わっている。本学で研究を始めてから間もなく、指導者としている時間と、学生として学ぶ時間に、興味深い違和感を感じることがあった。指導者としている時間は、学生が何を考え、求めているかを常に考えている。そして、学生が得る必要のある能力を見極めながら、段階的に導こうとしている。学生から言葉を引き出し、それらを客観視する立場で問いかけ、選択肢を見つけて提示する。学生と対話する時には、学生に問いかけ答えを聞くことが多い。しかし、私自身が学生の時間は、私が行っている指導のプロセスは存在しない。私が学生になれば、私自身が指導するように、自身に対して分析や導きができるのかもしれないという期待があったが、それは一度もなかった。私自身は私に指導できないということに気がついたのだ。

私の指導者が私ではないということを感じるたびに、自分の見えていない思考の問題点があると感じたのである。自分が学生に指導しているプロセスは、私自身には使うことができない。ならば、自身が研究していく思考プロセス自体を再構築する必要があると考えるようになった。

この再構築の結果、私の思考と作品に変化が起こりはじめた。自身の制作過程と作品を客観的な立場から考えられることが多くなり、前述した違和感は消えていったのである。制作のアイデアや工程に実験的な要素が多くなり、得た結果をヒントとして次のアイデアに生かしていった。これは、考えて行動することから行動して考えることへのプロセス変化だった。自分の知識や経験の中にある要素を組み合わせて行動することの問題点に気が付き、行動から得たことで思考する方法をとった。また、この変化は学生への指導プロセスにも変化を起こし、学生に向けた言葉も変わっていったのである。

この「問い」に向けた研究活動は、それまで続けてきた制作活動と作品を振り返ることで、自身が何を生み出してきたのか、なぜ作り続けているのかということを知ることに繋がり、そして私は、新たな制作へのモチベーションと、挑むべき制作テーマを見つけていくことになった。

私が追求してきた技法は、ランニングコストが低く制作を続けるために進めやすいこと、競合相手が多くないことを主な理由で選択したものだ。この板ガラスを用いるフュージング技法は私の制作に大きな影響を与えたが、先にも述べたようにいつしかそれは表現の枷となっていた。この技法を使って作ることが必須と考えるようになっていたのである。そのことに気がついたとき、自分の中にある矛盾を感じるようになった。一つの技法に習熟し、作ることができるものが増えるほど、表現できることが技法に縛られ、不自由になるという矛盾である。ガラス造形の作品は、用いられた技法が表現に影響を及ぼすが、それは作品のカテゴリーが技法別になるほど強いものである。素材と技法に表現が影響するのは必然だが、ここに疑問を持った時に、私が望む表現が、既存の技法や素材によって実現できるものではないのではないかと考えた。

このことから私は、制作のために用いる技法について再考するようになった。そして、私がガラスで表現する自由を得るための、ガラス独自の新しい技法を探していくことになる。また同じように、素材について新しいものを探していった。

この「問い」を探る活動をきっかけにして、制作と発表の場は海外まで広がっている。環境だけでなく文化や風土なども、私の制作や作品に大きな影響を与えることを経験した。そして、日本を周縁から知り感じることで、自身が存在するこの世界の矛盾や両義性を強く意識するきっかけになった。そしてそれらは、私の「問い」を解いていく鍵の一つだった。

制作に関わる思考の文章化について

論文を書くことについて、私は本学入学以前から関心を持っていた。それは私がアーティストステートメントを書きたいという、作品意図の文章化に意欲を持っており、制作意図や思考を文字で明解に表現する方法を学びたいと考えていたからだ。

アーティストは、作品を発表する時には必ずタイトルをつけ、求められれば意図を解説する。それは作品自体を言語化するということと同義であり、作品を見る側にとって、それを受容するために重要な情報源のひとつとなる。アートは一般的にわかりにくいものと捉えられ、見る側の漠然とした好みで判断される。その判断に理由が存在しないことも多い。またアーティスト自身も積極的に作品以外の方法を用いて意図を表明していこうとしない。それはなぜか。

デザイン教育の中では、マーケットリサーチやコンセプトを構築していく過程で、そのものがなぜ世の中に求められているのか、誰に必要なものなのかを明解に設定する。しかし、アートや工芸の教育の中では、そのようなデータ収集はあまり行われない。これらにとって市場が何を求めているのかという要素は、作者が何を求めているのかという要素ほど重要ではないのだ。

しかし、社会の中でアートや工芸は文化を持ち、産業として活動している。そして作家と作品を評価し受け入れるマーケットが存在する。

だとするならば、我々アーティストにも市場に向けた意思表現をする意味はあるのではないだろうか。

そして、自身の思考を整理する方法として、文章化する方法を用いることができないかと考えていた。

しかし、私は論文という形式自体に慣れておらず、どこから手をつけていいのかわからなかった。参考資料として、様々な論文を読んでみたが、常に違和感を持っていた。考えていることを文字に残していくことを繰り返し、２～５行程度の短い文章を書きためることしかできなかった。文章を書くということから学びはじめた。

同時に、美術教育論の講義を受講するようにした。美術教育学は、美術をどのように教育していくかを研究する分野である。作品を作り出す過程に意味を見出し、その価値をどうやって他者に伝達していくか、そして美術が人にとってどんな力を持っているのか、ということを学術的に研究していた。

自身の制作活動と作品を客観視することは、私の思考を整理するために必要なことであったが、この講義で学んだことはそのためにとても有益なことばかりだった。作品を自己批評し、自身の嗜好傾向を把握していった。また、私の作品と制作に関わる技法や環境などが、社会にとってどんな働きかけをしているのか考えるきっかけになった。社会の中で活動する理由、私の存在意義を考えるようになった。

そして、ガラス造形に対する思考、生き方に対する思考がゆっくりと浮かび上がってきて、自分を客観視することによる気付きが生まれてきた。

そんな中で、論文自体が社会にとってどのような位置づけのものなのかを考えるようになった。

論文とは何か。論文とは、研究した結果を論理的に報告したものである。（引用必要あり）

アーティストが制作をすることは学問ではない。しかし研究とも言える。私は研究している実感がある。それをまとめ、論理的に文章化することは社会的に論文とみなされるものと考えられる。しかしアーティストの個々にある思考は、社会にとって有益性があるものかわからない。社会に有益なものとして結論づけられなくても、論理性が伴えば論文として成立するのであれば、私の思考をまとめることは論文として成立するのではないかと考えた。

学術研究論文は、他者の研究である。歴史や事象に対して客観性を持って論じ、ある結論を導いていく。先行研究を知り、未だ調査されていない部分や論証されていない部分を主題として研究していく。

美術の制作に関わる文献には、アーティストを研究したものが見られるが、それは他者が研究して執筆したものがほとんどであり、客観的な論理性で表現されている。

では、アーティスト自身が自らの制作過程や思考、作品を研究して、論理的に研究していくという方法は、どのようなものがあるのだろうか。

私が書いてみたいこと、研究したいことは自身の思考やその表現である。そして自身に対する問いについて結論を導きたいのである。

アーティストが自らの思考を文章化するという行為は、アーティストが書くステートメントが主だ。また、個々の思考は会話のなかで多く表現されている。普段の制作活動の中で繰り返す思考は、多くの言葉を生み出しているはずである。それらをどんな方法で集め、整理し、批評するのだろうか。

アーティスト個々の思考は人々に様々な影響を与える。アーティストを志す者、憧れるもの、生活の中でアートを楽しむ者、教育者としてアートを制作する行為を伝える者など、アートの周辺には常に人がいる。

そして、なによりもアーティストは作品を長い時間をかけて制作する。その制作時間に膨大な思考を展開する。またその制作プロセスは千差万別だ。このことと、論文がどのような関わり方をするのだろうか。

アーティストが思考を論文という形に構築していく意義と、その役割、そしてアーティストが思考を構築していくプロセスは、私が最初に抱いていた論文執筆に対する予想とは大きく異なるものだった。

本論文は、私の「問い」から始まった活動のプロセスと、そこで見えてきた世界を論じていく。

序章では、問題関心と章立てについて述べる。

第１章では、本学大学院へ入学するまで制作していた作品について考察する。そして本学入学後、制作に関わる変化をどのような方法で作り出していったかを記していく。

　第２章では、本学大学院で探り始めた造形テーマにもとづいて制作してきた作品を中心に論じていく。

第３章では制作の素材となるガラスについて、印象や自身の造形に用いている特徴を記していく 。

第４章では、留学や国外滞在制作、作品展示など海外で得た制作経験から、制作において海外と日本との共通する部分や差異などを記し、また海外での制作を通じて再考することとなった日本の文化について論じていく。

第５章では、大学院、海外と制作に変化を与えたことで意識することになった二つの世界について論じていく。これは本論文と共に制作する作品の中心となるテーマになっている。

第６章では、制作について技法的側面から再考したことを論じる。ガラスには、ガラスの特性から生まれる独自の制作技法があるはずだと考え、既存のガラス造形技法の由来と目的を探るとともに、ガラスへの新しい造形アプローチに挑んだ。そこで作られた技法は、「問い」を探るための技法でもあった。

第７章では博士修了作品として制作していく作品について論じる。ガラスの持つ両義性が表現の核となる。そしてその表現は、二つの世界のどちらから見ているかによって変化する。ガラス独自の技法も含めた新たな造形アプローチに挑み、自身の「問い」について、一つの解を提示する。

結章では、本論で「問い」に対する解を得たことが、私自身と私の世界に何をもたらすのかを考察する。